省力・低コストな水稲の湛水直播栽培で営農再開

氏　名：高橋（たかはし）　松一（しょういち）

所在地：相馬郡飯舘村

【飯舘村の避難指示解除状況】
・平成 29 年 3 月 31 日　居住制限地域及び避難指示解除準備区域が解除

【プロフィール】
　農地の保全管理の傍ら、平成 28 年の水稲実証栽培を経て、平成 29 年から本格的な水稲作付を再開。湛水直播栽培で「里山のつぶ」を作付け。JA 出荷のほか、道の駅でも販売。
飯舘村認定農業者連絡協議会理事。

【被災前の経営と避難状況】
　震災前は、水稲 2.4ha（借地を含む）、ブロッコリー・インゲンなどの野菜約 2ha の作付けのほか、繁殖牛 5 頭を飼育。水稲品種は主に「あきたこまち」を作付けし全量を JA へ出荷。原発事故により二本松市内へ避難。

【営農再開のきっかけ】
　高橋さんは、避難直後の平成 23 年から地区の除草作業などを担い、平成 26 年からは、二枚橋・須萱地区農業復興組合の主要メンバーとして、福島県営農再開支援事業（以下、「営農再開支援事業」という。）を活用した除染後農地の保全管理に従事しています。
　平成 28 年には、村から水稲（10a）の実証栽培の依頼があり、水管理と除草などの栽培管理を担当しました。その時点では、村内での米作りがどうなるか分からない状況でしたが、高橋さんは「まず実証栽培をやってみないと次に進めない。」と考えて取り組んだそうです。
　収穫物の放射性物質検査では検出限界値未満となり、カリ質肥料の効果を確認できました。平成 29 年から本格的な営農再開を決意し、平成 28 年度原子力被災 12 市町村農業者支援事業（以下、「農業者支援事業」という。）を活用して、代かき機、畦塗り機、田植え機、直播用播種機、運搬機を導入しました。

高橋松一さん

【取組の内容】

平成 29 年には、飯舘村内で 8 戸の農家が水稲の一般栽培として 8.1ha を作付けしましたが、そのうち高橋さんは 5.9ha の田植えを実施しました。内訳は、自作地 1.9ha のほか、田植えの作業受託として地区内 4 戸分(2.9ha)と地区外 1 戸分（稲 WCS※1 用 1.1ha）です。品種のほとんどは「里山のつぶ」で、一部にモチ米品種「ヒメノモチ」を作付けしました。

田植え作業の高橋さん（飯舘村提供）

高橋さんは、避難先の二本松市から片道約 1 時間をかけて通いで農作業に従事しています。人手が少ない状況で本格的に営農再開するには、より省力で水稲栽培を実現する必要があると考え、新たに湛水直播栽培※2 を採用することにしました。

品種は「里山のつぶ」を用い、鉄コーティング種子※3 を専用機で播種。発芽直後の鳥害もほとんどなく、天候にも恵まれたことから、出芽・苗立ちは総じて良好となりました。夏の日照不足の影響を心配しましたが、10 月には一般栽培として 7 年ぶりに米を収穫でき、単収は震災前の地域の平年並 480kg/10a となり、等級は全量 1 等に格付けされました。

JA の土壌分析結果に基づいてカリ質肥料を施用した結果、全量全袋検査でも放射性物質は基準値以下となり、施用効果を確認できました。

湛水直播栽培について高橋さんは、「初めて取り組んだが、十分にできる手応えを掴んだ。育苗ハウスの設置や育苗作業を省略でき、播種作業も一人でできる。」とメリットを話してくれました。

収穫したコメの 8 割は JA に出荷しましたが、11 月から村内の道の駅「までい館」でも販売を開始しました。テレビや新聞で紹介されたこともあり、県外から買い求めに来る人もいて予想以上の売れ行きとなりました。サイズは 1kg、2kg、3kg、5kg の 4 種類で、市販の小袋を用意しましたが、来年産は新たに名前入りの袋をデザインしたいと考えています。

水稲栽培に必要な機械のうち、コンバインはあえて導入していません。コストを考え、収穫は作業委託に出すことで経営費の低減に努めています。

※1 稲 WCS：稲発酵粗飼料。水稲の子実と茎葉を同時に収穫して発酵させる牛の飼料。

※2 湛水直播栽培：稲の種を直接田に播いて栽培する方法（湛水と乾田の 2 種類がある）の一つ。育苗作業が不要のため移植栽培に比べて省力となる。

※3 鉄コーティング種子：湛水直播のうち表面播種する際、籾が水面に浮き上がらないよう鉄粉と焼石膏の混合物でコーティングしたもの。

【関係機関の支援】

初めて湛水直播栽培だったため、相双農林事務所農業振興普及部から技術情報や栽培指導を受けながら栽培

管理をしました。また、平成 28 年度の農業者支援事業の活用の際には、事業申請から機械の導入手続きまで飯舘村の支援を受けました。本事業は、営農再開に必要な機械・施設に対して国が助成（75%）しますが、さらに飯舘村の単費助成（5%）が加算されたことから、自己負担分が軽減され、営農再開を後押ししてくれました。

道の駅で販売している「里山のつぶ」

【課　題】

イノシシが急増しているため、対策として水稲作付ほ場の周囲に電気柵を設置しています。漏電防止のために夏期に下草刈作業を実施していますが、人手がないため、多くの時間・労力を必要としています。また、用排水路の斜面をイノシシが崩すことで土砂が水路に溜ることから、水路清掃にも多大な労力を要しています。

【目標・将来構想】

平成 30 年の水稲作付面積は、平成 29 年（5.9ha）より若干多い 6.7ha を計画しており、平成 31 年以降は、毎年の成果を見ながら、作付面積を徐々に増やしていきたいと考えています。「里山のつぶ」がモチ感があると評判が良いため、引き続き主要品種として作付けを予定しています。出荷先は主に JA とすることに変わりありませんが、今後も、道の駅での直接販売を続け、飯舘産米のファンが増えることを期待しています。

栽培方法は、湛水直播栽培に自信を得たことから、平成 30 年以降も引き続き省力・低コストの湛水直播栽培に取り組む考えです。

将来は、6 次化の取組として、飯舘村産のコメを原料とした日本酒を作りたいと考えています。平成 30 年に試験的に委託醸造し、評判が良ければ、有志を募って原料となる水稲面積の拡大を計画しています。村内で新たな作物や品目を栽培することにより、雇用の場が生まれれば、村民の帰還に繋がることになります。短時間労働や軽作業であれば、高齢者雇用の機会となり、一層帰還しやすくなると考えています。

高橋さんは、「後ろを向いていてはだめ。前を向いて新しいことに挑戦する。自分の姿を見て、ひとりでも営農を再開する仲間が増えてほしい。」と語ってくれました。

（平成 30 年 1 月）